Ⅱ 倭の王権と朝鮮三国

——虚像と実像

第3章 謎の四世紀と七支刀銘文

(1) 空白の期間

中国における魏・呉・蜀の三国の抗争では、まず二六三年に魏が蜀を滅ぼしましたが、その魏は二六五年、臣下の司馬氏がおこした晋にとって代わられます。晋はさらに二八〇年、呉を滅ぼして中国の統一を回復しました。しかし、国内の反乱がつづくうちに周辺では諸民族の活動が盛んになって華北に侵入し、三一六年に晋は滅亡します。翌三一七年、建康（いまの南京）に都をおいて東晋が再興しますが、中国の南半分を支配するだけの王朝になってしまいました。こののち建康を都として江南を支配した歴代王朝を南朝といいます。一方、華北は、侵入した五つの民族により多数の国家が分立・興亡する五胡十六国の時代となりますが、やがて四三九年に鮮卑族の拓跋氏がたてた北魏によって統一されました。これ以後、五八九年に隋が全土を統一するまでの時期が、南北朝時代です。

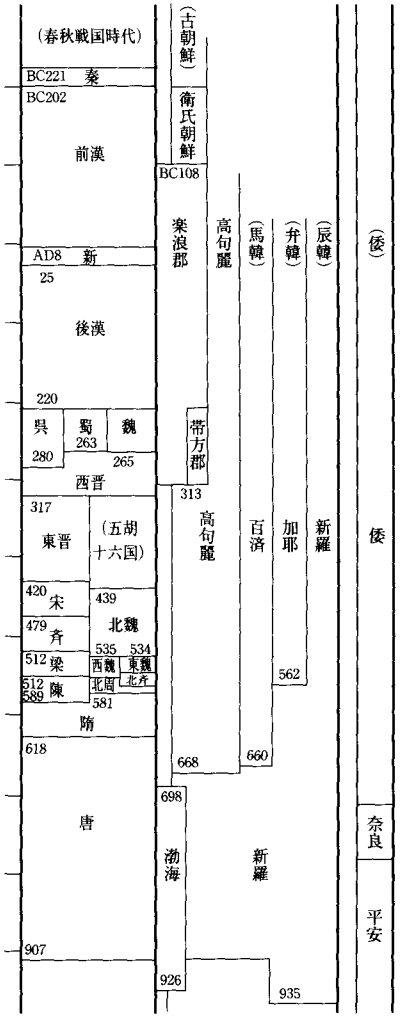
このような情勢のなか、朝鮮半島では高句麗が著しい成長をみせました。三〇〇年に即位した美川王の時代、三一三年に楽浪・帯方の両郡を攻略して中国の郡県支配に終止符をうちます。さらに三三一年即位の故国原王の時代にかけて、高句麗は五胡十六国のひとつで境を接する鮮卑慕容氏の前燕などと激しく抗争しながら、国家組織を整え勢力を拡げました。一方、朝鮮半島南部でも、郡県支配から解放されて韓族の動きが活発となります。馬韓地方では五十余の小国のひとつ伯済国が周辺諸国を統合して百済を建国し、三四六年の即位といわれる近肖古王の時期には飛躍の基礎がつくられました。また、辰韓地方では斯盧国を中心に新羅の統一がすすみ、三五六年即位とされる奈勿王の時期に王権の伸張が図られました。この三国のなかでも、南方へと領土拡大を図る高句麗と、百済とのあいだで、とりわけ激しい対立が展開されることになります。

倭国の状況はどうだったのでしょうか。魏に代わって晋が建国した翌二六六年、卑弥呼のあとを継いだ女王壱与が使いを送ったという記事を最後に、中国の歴史書から倭に関する記事はプツリと途絶えてしまいます。次に倭が登場するのは、四一三年からはじまる倭の五王の遣使についての記事ですから、約百五十年にわたって、倭は中国の記録から姿を消すのです。ところが、この空白の期間こそ、前方後円墳が出現して各地にひろがる時期であり、大和朝廷による統合が進展する時期にあたっていると考えられます。耶馬台国がどうなったのか、それと大和朝廷との関係はどうだったのか等々、日本の古代国家の成立過程を知るうえでは決定的に重要な期間が、中国史料において記録が欠落していることになります。「謎の四世紀」といわれるゆえんです。

この空白の期間を埋める数少ない記録が、百済王から贈られた七支刀の銘文と、高句麗の広開土王碑文にある倭に関する記述です。『日本書紀』にある神功皇后の伝説などに基づいた日本古代史のイメージは、四世紀の中ごろには大和朝廷が全国を統一し、さらに朝鮮半島へ出兵して朝鮮諸国を屈伏

させ、南部地域には「任那日本府」を設置して直接支配をおこなったというものですが、それを証明する史料が七支刀銘文と広開土王碑文、さらに五世紀において倭の五王が中国の王朝から贈られた称号だといわれました。

明治以降の日本の学者たちによるこうした古代史像は、第二次大戦ののち、植民地支配から解放された韓国（大韓民国）や北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の学界からの批判をもきっかけにして、再検討を余儀なくされます。この章では、七支刀銘文に関する研究の動向を中心に検討してみたいと思います。



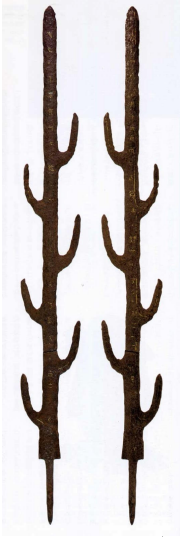
［３－１］　年表〈１〉

(2)　百済献上説

七支刀は、奈良県天理市の石上（いそのかみ）神宮に伝わってきました。全長が約七十五センチ、左右に互い違いに枝状の剣身が三枚ずつ出た、特異なかたちの鉄剣です。表面をおおっていた錆をおとし、文字が刻まれていることを発見したのは、明治初期に石上神宮の宮司をつとめていた菅政友（かんまさとも）でした。銘文は、表面に三十四字、裏面に二十七字があり、金で象嵌されていました。村山正雄『石上神宮七支刀銘文図録』（一九九六年）によって鮮明な写真を目にすることができますが、はっきりとは読み取れない文字もおおく、百年以上の間にさまざまな解読が試みられてきました。だいたいの読み方を示せば次のとおりですが、＊印の文字をはじめ種々の見解があるのが現状です。

（表面）泰和＊四年□月十六日、丙午正陽、造百練銕＊七支刀、生＊辟百兵、宜供＊供侯王□□□□作

（裏面）先世以来、未有此刀、百済王世子＊奇生聖音＊、故為倭王旨造、伝示＊後世



［３－２］　七支刀

ところで、『日本書紀』によると、神功皇后四六年、任那地方の卓淳国に派遣された斯摩宿禰（しまのすくね）は、百済が通交を欲していると聞いて従者を遣わし、ここにはじめて百済との交流が生じます。ついで四七年、百済王が久氐（くてい）らを使

者として派遣し、大和朝廷に朝貢してきました。そして、四九年に、将軍として派遣された荒田別・鹿我別が百済の将軍木羅斤資とともに新羅を討って任那地方の七国を平定し、さらに西方の地域を征服したうえ百済にそれを与えてやったといいます。そのうえで、使者の千熊長彦が百済へ行って百済王と会盟し、百済王は「常に西蕃と称して春秋に朝貢する」と誓いました。こうして五二年に、百済王の使者久氐がきて、服属のしるしに「七枝刀」を献上したというのです。

この記事と結びつけて石上神宮の鉄剣を説明しようとしたのが、星野恒「七支刀考」（『史学雑誌』三七、一八九二年）でした。論文発表の翌年、読み取りにくかった文字は「七」とされ、それまで「六叉刀」などといわれてきた鉄剣が「七支刀」と呼ばれるようになります。百済服属の事実を示すのが、この七支刀だとされたわけです。

ただし、『日本書紀』の「七枝刀」と石上神宮の七支刀を同一とするには、難かしい問題が残っていました。表面最初の年号に関して、発見者の菅は「泰始」と読み、西晋の泰始四年（西暦二六八年）にあてました。しかし、神功五二年はそのまま西暦にすれば二五二年であり、製作年が贈呈年より後になってしまいます。そのうえ、神功皇后時代の記述が干支二運くりあげられていることは、紀年論争を経てすでに明らかになっていましたから、神功五二年の出来事は実際には百二十年くりさげた西暦三七二年のこととなるはずで、西晋の泰始四年とは百年以上離れてしまいます。このほかに、「泰初」と読む説などもだされましたが、いずれもこの問題を説明できませんでした。

七支刀を『日本書紀』の記述と結びつけて百済献上説を基礎づけ、銘文の文字の解読をすすめることによって研究上の注目を集める契機となったのは、第二次大戦後の福山敏男「石上神宮七支刀」（『美術研究』一五八、一九五一年）でした。福山は年号の部分を「泰和」と読み、さらに「泰」が金石文では「太」と通用するといいます。このうえで蓋然性の高いものとして、東晋の「太和」四年（西暦三六九年）に比定しました。月日について福山は「五月十一日」と解読しましたが、この日が「丙午」にあたらないことについては、「丙午」が刀剣銘や鏡銘などで用いられる吉祥句であり、必ずしも現実の月日をさすわけではないことを証明します。

これによって、七支刀は『日本書紀』の「七枝刀」といっそう強く結び付けられ、百済服属を示す確実な証拠ということになりました。それに止まらず、「七枝刀」の実在が確認されたことによって、任那日本府をはじめ『日本書紀』の朝鮮関係記事が、信頼性を高める結果になったのです。

(3)　百済下賜説および東晋下賜説

百済から献上されたものだとする説は、七支刀の銘文そのものの検討に基づいた解釈というより、『日本書紀』の記述にしたがって理解しようとする見解でした。ところが、こうした明治時代以来の研究に対し、根本的な批判がおこってきます。その口火をきったのが北朝鮮の歴史学者金錫亨でした。

金錫亨は一九六二年の論文「三韓三国の日本列島内分国について」（『歴史科学』一九六三年第一号）において、まず第一に、「侯王」ということばに注目しました。侯王とは、もともと漢代において皇帝と君臣関係をむすんで封国を与えられたものですが、倭王に対して百済王が侯王という呼び方をしている以上、倭と百済の関係は、通説とは反対に、百済の方が上位にあるはずだというのです。

第二に、「倭王旨」という言い方が問題になります。金論文は、この「旨」を倭王の固有名詞とみるのですが、「倭王○」という言い方は、中国皇帝とのやりとりに使われる形式であり、百済王がこうした呼び方をしている以上、倭王を目下の存在とみなしていたことが明らかだといいます。

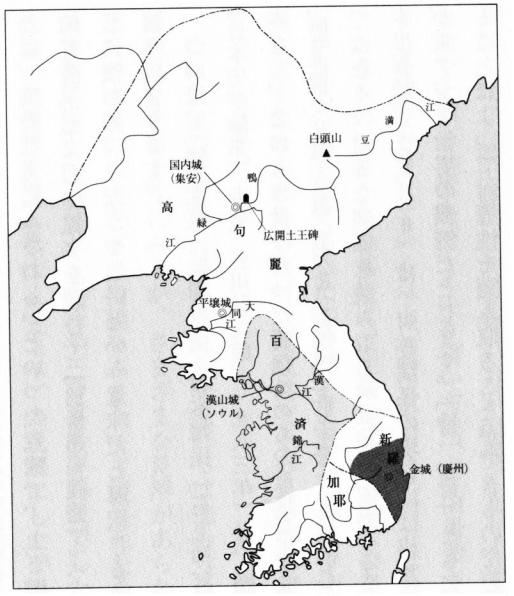
これらのことから金錫亨は、従来の日本人学者の見解とはまったく逆に、この七支刀は目上の百済王が目下の倭王に下賜したものだと主張したのです。それまでの研究が、もっぱら『日本書紀』に依拠してすすめられたのに対して、銘文そのものの解釈が必要なことを示した点でも画期的な指摘でした。

これ以後の研究は、金錫亨説を無視しては進められない情況となったわけですが、当時の倭と百済の関係をどのようにみるか、さまざまな見解があらわれます。倭の優位性を前提にしながら、銘文の形式が下賜の形式だとの指摘をふまえて主張されたのが、栗原朋信「七支刀銘文についての一解釈」（『日本歴史』二二六、一九六六年）の東晋下賜説でした。栗原は、榧本杜人「石上神宮の七支刀とその銘文」（『朝鮮学報』三、一九五二年）の見解にしたがって裏面中央部の文字を「聖晋」とよみ、晋王朝を崇める姿勢をみせているとします。さらに、泰和という東晋の年号を使っていることなどから、この七支刀の背後に東晋王朝の意図があると推測しました。東晋王朝が百済王に命じて刀を製作し、倭王へ贈らせたものと考えたのです。

(4) 百済＝倭対等説

金錫亨の問題提起にどのようにこたえるべきか。まず、「侯王」について、神保公子「七支刀の解釈をめぐって」（『史学雑誌』八四―一一、一九七五年）は、漢代以降の金石文では「宜侯王」という言葉が慣用的に使われており、身分関係を示す用語というよりも、吉祥語としての意味が強いのだといいます。「侯王」とは、この場合、身分の高い裕福な人を一般的にさしているだけであり、「宜侯王」とは、高貴な人にふさわしいといった意味で、上下関係を直ちにしめすものではないとしました。佐伯有清「七支刀の銘文を読む」（『別冊週刊読売』二、一九七六年）は、「供供」の文字が「恭恭」と同じに使われ、うやうやしいという意味だと解釈します。この部分は、「恭恭たる侯王に宜し」という読みになります。

ついで、「倭王旨」に関して、鈴木靖民「石上神宮七支刀銘についての一試論」（坂本博士頌寿記念『日本史学論集』上巻、吉川弘文館、一九八三年）は、贈与主体の「百済王世子」の次の「奇」を人名とみなし、このとき世子だった貴須（のちの近仇首王）をこの一文字で表したのだとします。とすれば、「倭王旨」という言い方と「百済王世子奇」とは同じ形式であり、どちらが優位にあるといったものではなく、対等な関係を読み取るべきだと主張しました。近年の吉田晶『七支刀の謎を解く』（新日本出版社、二〇〇一年）は、対等関係の場合には相互に地位や称号のみを呼び合い、名は記さないのが東アジア世界の慣例だとします。「旨」「奇」ともに人名ではなく、「倭王」「百済王世子」としていることによって対等性を読み取ることができるのだと主張しています。王でなく世子と倭王を対等な



［３－３］　４世紀の朝鮮半島

相手としているところに、百済の意識としては、自らを優位に置いているのかもしれないといいます。

なお、「聖晋」については、銘文の文字の解読に努力を傾注してきた村山正雄が一貫して「聖音」だと主張し、これを仏教用語として理解しようとしています。これに対して山尾幸久『古代の日朝関係』（塙書房、一九八九年）や木村誠「百済史料としての七支刀銘文」（『人文学報』三〇六、二〇〇〇年）は、道教との関連を指摘しました。吉田晶は、「百済王世子奇生聖音」を、「百済王の世子、奇しくも聖音に生き」と読んでいます。「聖晋」とは読めないのだとすれば、東晋下賜説は主要な根拠を失うことになりますが、三七二年に百済は東晋へ遣使して冊封をうけており、東アジアの国際関係のひろがりの中で七支刀を理解することの必要性は、今後も継承されなければならないでしょう。

いずれにしても、七支刀の銘文からは、百済が大和朝廷に服属した証拠となるような内容を読み取ることはできません。製作・贈与の主体である百済の立場にたって、銘文の内容に即した解釈を追究することが、まずは重要だとおもわれます。

南下をめざす高句麗と、百済とが激しいつばぜり合いを演じていたのが、当時の朝鮮半島の情勢でした。三六九年には、高句麗の故国原王が二万の軍勢を率いて百済を攻め、百済の近肖古王は世子の貴須に命じて反撃を試みています。三七一年になると、また高句麗が攻撃しますが、百済は三万の兵で反撃し、逆に平壌城（ピョンヤン）で故国原王を戦死させました。その余勢をかって、百済は漢山（ハンサン）城に都を移します。これ以後も、高句麗と百済の対抗が、朝鮮半島の情勢の軸になっていくのです。

このような高句麗との戦いを有利にすすめるため、百済は活発な外交を展開しました。すでに三六六年と三六八年には、新羅へ使者を派遣しており、三七二年には、東晋に入朝して冊封をうけます。こうした積極外交の一環として倭との同盟が成立したのであり、それを証明するものとして贈られたのが七支刀だったとおもわれます。

『日本書紀』の記述は、百済が日本の朝貢国だったという立場で貫かれています。神功皇后の時期の朝鮮関係の記事は、ほとんどが『百済記』からの引用なのですが、この書物は百済滅亡後に亡命してきた百済人がまとめて『日本書紀』の編纂局に提出したものとみられ、天皇の臣として仕える立場から迎合的な内容になっていたと考えられます。百済がもともと大和朝廷に臣属してきたことを強調し、証明することに主眼をおいた書物でした。そうした文脈のなかで、神功四六年から五二年にかけての両国関係成立の経緯が、朝貢関係の始まりとして描かれているのです。この叙述に全面的に依拠した解釈が、百済献上説だったということになるでしょう。

［3－4］『日本書紀』神功紀の記事

『日本書紀』神功紀				朝鮮中国史料		
仲哀9	庚辰	200	神功皇后の新羅征伐			
神功1	辛巳	201	神功摂政元年			
5	乙酉	205	新羅を討つ			
39	己未	239	(魏志：倭の女王遣使)	己未	239	卑弥呼の遣使。
46	丙寅	246	斯摩宿禰が卓淳国に至る。さらに従者を派して百済と交通を開らく。			
49	己巳	249	荒田別らを派遣して百済の木羅斤資らと共に新羅を討つ。任那七国を平定。西方を討って百済に与える。百済肖古王が千熊長彦と会盟して「西蕃と称し、春秋に朝貢」すると約束。	己巳	369	七支刀の製作(東晋泰和4年)。高句麗が百済を攻撃。
				辛未	371	百済が平壌を攻め故国原王を戦死させる。
52	壬申	252	百済が久氐を遣わして七枝刀を献上。	壬申	372	東晋へ入朝
55	乙亥	255	百済の肖古王死去。	乙亥	375	近肖古王死去。近仇首王即位。
56	丙子	256	王子の貴須が王となる。			
62	壬午	262	沙至比跪が新羅の美女に惑わされ加羅を討つ。木羅斤資に命じて加羅を回復する。			
64	甲申	264	貴須王死去。枕流王即位。	甲申	384	近仇首王死去。枕流王即位。
65	乙酉	265	枕流王死去。辰斯王即位。	乙酉	385	枕流王死去。辰斯王即位。
66	丙戌	266	(晋の泰初2年：倭の女王貢献)	丙戌	266	壱与が晋に遣使。
69	己丑	269	神功皇后死去。			

第4章 広開土王碑文の研究

(1) 「渡海」の主語

七支刀の銘文とともに、四世紀に倭が朝鮮半島へ進出して百済や新羅を服属させ、任那日本府を置いたことを示す史料だとされるのが、高句麗の広開土王（好太王）碑文です。広開土王の即位は西暦三九一年。その名のとおり、在位期間中に領土を拡大し、高句麗が発展する基礎を築きました。四一三年の死の翌年、後を継いだ息子の長寿王が、父王の業績を記念して、首都国内城（いまの中国吉林省集安）の東郊に建てたのが広開土王陵碑です。鴨緑江岸から中国側に一キロほどはなれた場所に立っています。

石碑は、高さ六・三メートル、底部は一辺が一・四から二メートルの四角形で、四つの面に千七百七十五ほどの文字が刻まれています。このうち第一面から第三面の半ばまでは、広開土王が敵と戦って領土を拡大していった様子が、年次をおって記述されています。その第一面の八行目から九行目にかけて、辛卯の年つまり西暦三九一年に、倭が来攻したという記事がでてくるのです。

［４－１］　高句麗の広開土王（好太王）碑

百残新羅旧是属民由来朝貢、而倭以辛卯年来渡海破百残□□新羅、以為臣民

明治以来の日本の歴史研究は、この部分が大和朝廷が朝鮮半島へ進出して百済や新羅を服属させ、任那日本府を設置した動かぬ証拠としてきました。前半部分は、高句麗にとって百済・新羅はもともと属民であり、高句麗に朝貢してきていたという内容で、読解上おおきな問題はないでしょう。問題は後半部分にあります。倭が辛卯の年に来りて海を渡り、百済・□□・新羅を破り、以て臣民と為したという具合に読み、□□の部分には任那を入れるのが一般的でした。あるいは、ここに動詞の「更討」「又伐」などをいれ、倭が百済を破り、更に新羅を討ち、以て臣民と為したというように読んだりしました。

このように倭の威勢を読み取ろうとする通説に対して、解放後に南北朝鮮の学界から、根本的な批判が現われてきました。一九五五年に韓国の鄭寅普が論文「広開土境平安好太王陵碑文釈略」を発表します。さらに北朝鮮では、朴時亨が『広開土王陵碑』を、金錫亨が『初期朝日関係研究』を同じ一九六六年に著わしました。これが日本に紹介されて大きな衝撃をおよぼし、古代史の捉え直しの気運をたかめるきっかけとなります。

これらの新説は、いずれも「来」と「渡」の間で文を区切り、倭が辛卯年を以て来り、これに対して高句麗が海を渡ったものと解釈しました。広開土王の事績を記録した碑文に即して、あくまでも高句麗を主体として解釈すべきだと主張し、「渡海」の主語を倭ではなく高句麗ないし広開土王とするわけです。

鄭寅普・朴時亨は、さらに「破」と「百残」の間にも読点を打ち、高句麗が海を渡って倭を破ったと読みます。その読点の後は、百済を主語とし、倭と通じた百済が新羅を討ったと解釈しました。「以為臣民」について、鄭説では広開土王が百済・新羅を臣民と思ったとし、朴説では百済が新羅を臣民にしたと解釈しています。これに対して、金錫亨の場合は、全体を高句麗主体で解釈し、高句麗ないし広開土王が百済を破って、百済や新羅を臣民にしたと考えました。

［鄭説］（高句麗）渡海破（倭）、百済臨侵新羅、（広開土王）以為臣民、
［朴説］（高句麗）渡海破（倭）、百済招（倭）侵羅、以為臣民、
［金説］（高句麗）渡海、破百済、□□羅、以為臣民、

いずれにせよ、明治期に拓本がもたらされて以来、疑われることがなかった通説に真っ向から疑問を呈し、倭の活躍の史料としてでなく、高句麗ないし広開土王の活躍の史料として解釈べきだというものだったのです。

(2) 参謀本部

こうした朝鮮人研究者の問題提起を受けて、明治以来の碑文研究の再検討が本格化しました。人びとから忘れられていた石碑が、永い年月を経て発見されたのは一八八〇年でしたが、その拓本が日本へ持ち込まれたのは、わずか三年後のことで、東京の国立博物館に所蔵されているものがそれに当たります。中塚明「近代日本史学史における朝鮮問題」（『思想』五六一、一九七一年）は、この拓本をもたらしたのが陸軍参謀本部の将校である酒匂景信（さこうかげあき）であり、その解読が参謀本部でおこなわれたこと、その時の解釈が以後の研究を規定し、疑われることなく受け継がれてきたことに注意を喚起しました。

さらに、佐伯有清「高句麗広開土王陵碑文再検討のための序章」（『日本歴史』二八七、一九七二年）は、防衛庁戦史室に残る史料などから酒匂の任務が密偵であったことを明らかにします。酒匂は中国人に変装し、仕込み杖をもってこの地域に入って活動したうえ、わざわざ嵩張る拓本をもって帰国したのでした。参謀本部は任那研究に力を入れ、すでに一八八二年に『任那考』を編纂していましたが、ひきつづき酒匂が持ち帰った拓本の研究をすすめます。拓本は一八八九年刊行の『会余録』第五集に、参謀本部編纂課の横井忠直の論文「高勾麗古碑考」および釈文とともに、はじめて写真石版で一般に紹介されました。その新聞公告には、「往昔我邦人が百済新羅任那加羅等を征服したる事蹟を記せり」とうたわれています。

さらにまた、衝撃的な見解があらわれます。李進熙「広開土王陵碑の謎」（『思想』五九五、一九七二年）の、碑文改竄説です。酒匂が持ち帰った国立博物館所蔵の拓本は非常に鮮明なもので、教科書などにはこの写真がのせられ、研究はこれをもとになされてきていました。李進熙は、この酒匂の拓本が鮮明だったのに、その後に作られたと思われる拓本が不鮮明で読み取りにくく、一九〇〇年ごろからのちの拓本が再び読みやすくなっていることに疑問をいだきました。そして、一九一三年におこなわれたはじめての学術調査について、碑面には石灰が塗りたくられていてあたかも「石灰仮面」の如き状態だったという今西龍の報告に着目します。酒匂の拓本が鮮明なのは既に石灰を塗ったうえから拓本を作ったからで、その後の拓本は石灰がはげおちていたため不鮮明になったが、再び石灰を塗り直したため鮮明なものが作られるようになったのだと考えました。

スパイである酒匂がわざわざ石灰を塗って作ったとすれば、その拓本自体が怪しいといわざるをえません。しかも、一九〇五年に鳥居龍蔵が行くまで現地を訪れた日本人はすべて軍の関係者でした。酒匂の偽造が発覚するのを防ぐために、日本軍が石灰を再塗布したのではないか、軍による石灰塗布作戦が実施されたのではないか、李進熙はこのように推測します。実際、軍はこの碑文に執着し、日露戦後の時期、石碑自体を東京へ持ってきてしまおうという計画までが真剣に練られていました。筏で鴨緑江を下り、河口まで軍艦を派遣して日本へ運ぼうとしたのです。国際法に抵触するこの計画は、さすがに実行されませんでしたが、石灰作戦もまったく荒唐無稽のこととは言い切れない状況が確かにあったのです。

［4－2］ 酒匂景信

(3) 原石拓本の探求

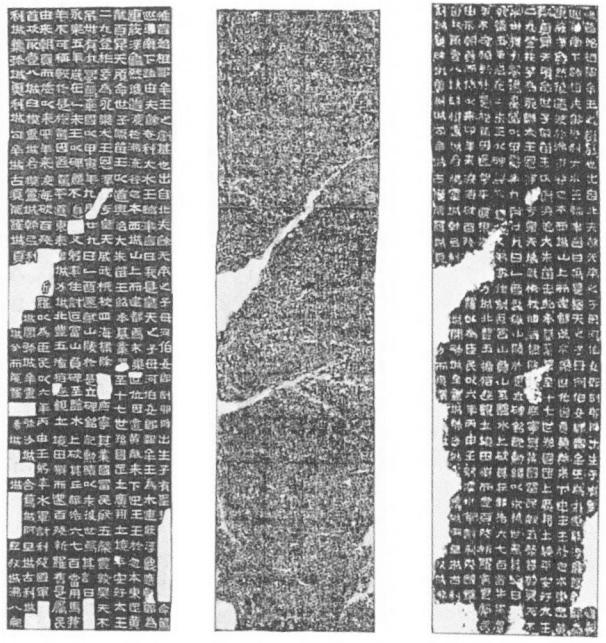
改竄説は大きな衝撃をよび、賛否をめぐって論争がおきますが、拓本そのものの再検討が避けてとおれないことを明白にしたところに、李進熙説のおおきな意義がありました。日本陸軍による石灰塗布作戦の有無はともかく、石灰の上から作成された拓本をもとにした研究は、もはや成り立たないことになります。現地での調査にもとづいて、王健群『好太王碑の研究』（吉林人民出版社、一九八四年）が出されました。ただ、風化の進行と、現在は樹脂加工による保存措置がとられていることなどのため、原碑による調査にも限界があります。

一方、すでに水谷悌二郎が自らの所蔵拓本を踏まえておこなった研究「好太王碑考」（『書品』一〇〇、一九五九年）を継承・発展させ、武田幸男は拓本の詳細な研究をすすめました。武田によれば、酒匂が持ち帰ったのは、正確には墨水廓塡本というべきものでした。碑面から直接採取した拓本は、風化がすすんでいて鮮明でないため、拓本をもとにして淡い墨で別紙に写し取り、そのあと濃い墨を使って字画をなぞり、廓塡して完成させるという技法によって作られたものです。鮮明なのは当然だったといえます。

これに対して、一八九〇年代になると、鮮明な拓本を作るため、碑面に石灰を塗って字画をはっきりさせるやり方がおこなわれるようになりました。この方法によって、拓本が大量に作れるようになったわけです。したがって、それ以降の拓本は、石灰拓本というべきもので、もとの碑面を正確に示しているとはいえません。ただし、石灰の塗布は付近に住む中国人の拓工が販売の目的でやったことで、日本軍による作戦という李進熙説は成り立たないとします。

ところが、石灰拓本があらわれるまえ、一八八七年ごろからの一時期、原石から直接採取した拓本が、それ自体の価値を認められるようになった時期がありました。武田は、この時期の原石拓本に注目し、一八八九年に北京の名拓工といわれた李雲從が、現地へ行って作成した原石拓本が存在することを明らかにします。水谷が所蔵した拓本もそのひとつだったのですが、これをふくめて中国などで六本が原存していることをつきとめました。その主要なものを写真図版としてまとめたのが、『広開土王碑原石拓本集成』（東京大学出版会、一九八八年）です。

その後、他にも原石拓本が存在していることが明らかになりつつあります。改竄説の衝撃は、



［４－３］　拓本の検討　左から墨水廓塡本・原石拓本・石灰拓本
（武田幸男『広開土王碑原石拓本集成』より）

結果として、拓本研究の進展をもたらす要因として機能しました。原石拓本のさらなる調査と、それにもとづく研究が不可欠なのです。

(4) 前置き文

辛卯年の記事の解釈についても、南北朝鮮学界での批判が契機となって、従来の解釈への再検討がすすめられることになります。そこでは、辛卯年条を碑文全体のなかに位置づけて解釈する必要が強調されました。浜田耕策「高句麗広開土王陵碑文の虚像と実像」（『日本歴史』三〇四、一九七三年）は、碑文における広開土王の事績を記した部分の記述方式には一定の型があることに着目します。碑文は、永楽五（西暦三九五）年にはじまって、六年・八年・九年・一〇年・一四年・一七年・二〇年と、全部で八カ年について年代順に広開土王が敵と戦った功績を記述していますが、その筆法には大きくいって二つの類型があります。

第一は、「王躬率」（王みずから率い）と表現される記事。広開土王がみずから軍を率いて出撃し、敵と戦った場合です。一九年条だけは、この表現でなく「王巡下」となっていますが、みずから軍を率いて巡回したということで、第一類型にふくめて考えることができます。これに対して第二の型は、「教遣」（遣わしむ）という表現です。広開土王は都にとどまったまま、命令を下して軍を派遣し、敵を破ったというものです。浜田論文は、この二つの場合の書き方が異なっているといいます。

第一類型　［年次］（出撃する理由）王躬率……

第二類型　［年次］教遣……

王が命令を下して軍隊を派遣するだけの第二類型の場合は、年次に続けてすぐに「教遣」云々と記述されます。しかし、王が自ら出撃する第一類型の場合は、ひとつの例外をのぞき、すべて年次と「王躬率」（あるいは「王巡下」）との間に、なぜ王がわざわざ自分から出かけて行かねばならないのか、

（第一面7行目～10行目）
永楽五年歳在乙未王（以稗麗不□□人）躬率往討過富山負山至鹽水上破其三部洛六七百営牛馬羣
羊不可稱數於是旋駕因過襄平道東来候城力城北豊五備海遊觀土境田猟而還（百残新羅舊是属民
由来朝貢而倭以辛卯年来渡□破百残□□新羅以為臣民）以六年丙申王躬率□軍討伐残國軍□□
南攻取寧八城臼模盧城各模盧城幹氏利城□□城關弥城牟盧城弥沙城□舍蔦城阿且城古利城□

（第二面5行目～9行目）
迷之愆録其後順之誠於是得五十八城村七百将残主弟并大臣十人旋師還都八年戊戌教遣偏師觀
肅慎土谷因便抄得莫□羅城加太羅谷男女三百餘人自此以来朝貢論事九年己亥（百残違誓與倭和
通）王巡下平穰而新羅遣使白王云倭人満其國境潰破城池以奴客為民歸王請命太王恩慈稱其忠誠
□遣使還告以□計十年庚子教遣歩騎五萬往救新羅従男居城至新羅城倭満其中官軍方至倭賊退
□侵背急追至任那加羅従拔城城即歸服安羅人戍兵□新羅城□城倭□倭潰城大

（第三面3行目～8行目）
□□□朝貢十四年甲辰（而倭不軌侵入帯方界□□□□□石城□連船□□□）王躬率□□従平穰
□□□鋒相遇王幢要截盪刺倭寇潰敗斬殺無數十七年丁未教遣歩騎五萬□□□□□□□□師
□合戦斬殺蕩盡所獲鎧鉀一萬餘領軍資器械不可稱數還破沙溝城婁城□住城□□□□□那
□城廿年庚戌（東夫餘舊是鄒牟王属民中叛不貢）王躬率往討軍到餘城而餘城國駭□□□□□□
□□王恩普覆於是旋還又其慕化随官来者味仇婁鴨盧卑斯麻鴨盧楅社婁鴨盧肅斯舍鴨盧□□□
鴨盧凡所攻破城六十四村一千四百

［４－４］　碑文の筆法
（武田幸男『高句麗史と東アジア』の釈文を参照）

その理由を説明する文が挿入されています。敵が強大かつ凶悪で、高句麗にとって不利な状況が書かれているのです。

さて、第一類型におけるただひとつの例外というのが、永楽六年の記事でした。百済と戦って大勝利を得た記録なのですが、「六年丙申」のあとにすぐ「王躬率」が続いていて、理由を説明する文が入っていません。第一類型の記述は全部で五カ所あるのですが、例外はこの一つだけです。そして、まさに、この「六年丙申」の直前にあるのが、問題の辛卯年条なのです。辛卯年つまり西暦三九一年の記事は、永楽五（西暦三九五）年と同六（三九六）年の間にはさまれていて、年次を追って書かれている武勲記事のなかでも異質です。

この辛卯年の記事は、もともと「六年丙申」と「王躬率」の間に入るべき、広開土王が自ら軍隊を率いて出撃しなければならなくなった理由を説明する文章なのではないか。これが浜田論文の主張でした。年次と「王躬率」の間に挿入するには長すぎるためか、あるいは、その後の年次にも倭と関連する戦闘の記事が出てくることからすれば、それら全体にかかわる理由としてか、ともかくもパターンをくずして「六年丙申」の前に出されたものと考えられます。

つまり、辛卯年条は、永楽六年に広開土王が自ら軍隊を率いて出撃しなければならなかった理由として、西暦三九一年以来、倭が侵入してきて高句麗との間に対立が続いていたことを説明する文章であったということになります。そうした観点から考えれば、「渡海」の主語は倭でなければならず、「以為臣民」も倭がそのようにしたとするのでなければ意味がないということになります。もともと百済・新羅は高句麗の属民だったのに、辛卯年以来、倭がやってきて百済などを破って臣民とした。

だからこそ、広開土王は自ら軍を率いて出撃し、大戦果をあげたのだというわけです。

碑文の叙述は、武田幸男『高句麗史と東アジア』（岩波書店、一九八九年）が明快に分析するとおり、高句麗の大王を中心にした独自の秩序構造の存在を前提にしています。そこにおいて百済や新羅は、本来的に高句麗に朝貢すべき属民とみなされていました。李成市「表象としての広開土王碑文」（『思想』八四二、一九九四年）は、碑文をめぐる論争が国民国家形成のための言説という枠組みのなかで展開されてきたことの問題性を指摘するとともに、高句麗の史料として、その世界観の文脈に即した理解が必要なことを強調しています。碑文において倭は、高句麗中心の世界秩序を外部から脅かす敵として位置づけられます。対立の相手である百済の主体性は徹底して否認し、その抵抗はもっぱら背後の倭との通謀として説明されており、高句麗の戦いは倭との対決として描かれました。したがって、倭が強大であればあるほど、狂暴であればあるほど、その侵入に対する広開土王の戦いは正当性を増し、勝利した王の偉大性が高まるというしくみになっているのです。

百済や新羅が属民だという表現が、高句麗の一方的な主張であるのと同様に、倭が百済・新羅を臣民にしたという記述も、客観的な事実とは言い難いものです。結論だけからすれば、「渡海」の主語は通説どおり倭とするのが正しいと思われますが、ここでは逆の意味で倭の活動は誇張されているはずです。本来あるべき秩序を破壊する倭の悪逆非道ぶりを際立たせる理屈が、百済や新羅を「臣民と為」したというものだった点に留意しなければなりません。

第5章 「任那日本府」の問題

(1) 倭の五王

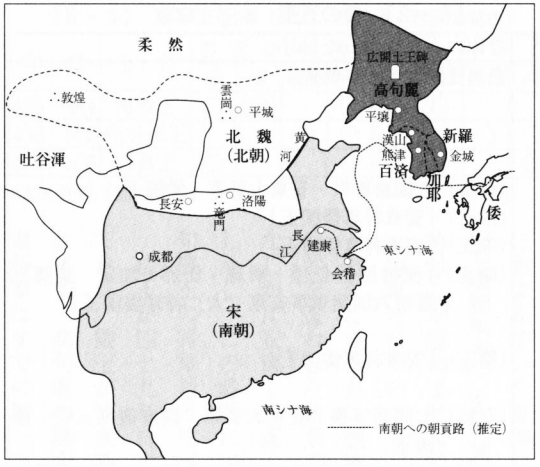
卑弥呼のあとをついだ壱与が晋へ使いを送ったのが二六六年。それ以来とだえていた倭国に関する記事が、ふたたび中国の歴史書に登場したのは、一世紀半のちのことでした。四一三年に倭国が朝貢してきたという記録があり、さらに四二一年から五〇二年にかけて、倭の五人の王の遣使や、中国王朝からの冊封、称号授与の記事がつづきます。当時の中国は南北朝の対立時代にありました。江南地方を支配した南朝は、東晋・宋・斉・梁とつづいて、最後の陳が六世紀末に北朝からでた隋によって併合されることになりますが、倭国王はこれら南朝の諸王朝へ使いをおくり、冊封をうけたのです。

五人の王の名は、讃・珍・済・興・武と記されており、これらがどの「天皇」にあたるのか、従来からさまざまに議論されてきました。このうち最後の武が、実名「オオハツセノワカタケ」で、『日本書紀』に「大泊瀬幼武」、埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣に「獲加多支鹵大王」、熊本県江田船山古墳出土の鉄刀に「獲〇〇〇鹵大王」と記された「雄略天皇」を指すことはまちがいないとみられます。

日本列島の諸地域に支配を拡大しつつあった彼らが、その勢力を固め、さらに諸王権が競いあう東夷世界で地歩を確保するために、中国王朝のお墨付きを得ようとしたわけです。

朝貢した倭の五王は、見返りに中国皇帝から称号をもらいました。たとえば、四七八年に武が宋の皇帝から受けた称号は、つぎのようなものです。

使持節、都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大将軍、倭(国)王



[5－1] 5世紀の東アジア

明治以来の研究では、こうした称号が、当時の朝鮮半島での倭国の優位性を示すものとして強調されました。とりわけ、七支刀銘文や広開土王碑文とともに、「任那日本府」が存在したことを示す絶対的な証拠と考えられました。はたして、そのようなことがいえるのでしょうか。

この称号のうち「使持節」「都督……諸軍事」というのは、軍事支配権に関するものです。軍令違反者への処罰にかかわる「使持節」は、使持節・持節・仮節という三等級の最上位で、皇帝の軍事大権の委任に関

［５－２］　倭の五王

西暦	王名	王朝	自称および授かった称号
413	一	東晋	高句麗使とともに朝貢？
421	讃	宋	
425	讃	宋	
430	一	宋	
438	珍	宋	（自称）六国諸軍事・安東大将軍・倭国王
			（除正）「安東将軍倭国王」
443	済	宋	（除正）「安東将軍倭国王」
451	済	宋	（除正）「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東（大）将軍倭国王」
460	一	宋	
462	興	宋	（除正）「安東将軍倭国王」
477	一	宋	
478	武	宋	（自称）七国諸軍事・安東大将軍・開府儀同三司・倭国王
			（除正）「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭王」
479	武	斉	（除正）「鎮東大将軍」　遣使はなく称号の授与のみ
502	武	梁	（除正）「征東将軍」　称号の授与のみ

する「都督」も、都督・督・監の三ランクの最高位にあたります。この軍事支配権がおよぶ範囲のなかに、新羅や任那・加羅の名が含まれていることが問題となるのです。秦韓とは辰韓、慕韓とは馬韓のことで、新羅や百済に統一された地域のかつての名称まで列記したのか、あるいは、それらの地域のうちで未だ統合されつくしていない部分をさしているのでしょう。新羅はともかくとして、任那の軍事支配を認めた称号は、いかにも倭国による任那支配を証明しているようにみえます。

しかしながら、この時代に中国王朝が各地の王に与えた軍事支配権の称号を検討した坂元義種の研究によると、称号に記された地域名はかならずしも実際に軍事支配がおこなわれたことを意味しているわけではありません。たとえば「都督河西諸軍事」の称号についてみると、四二三年から四四四年にかけて河西王に与えられましたが、同時に四三二年から五〇二年に吐谷渾王にも授与されており、さらには四七六年から五〇五年のあいだ宕昌王にも認められていました。同じ時期に、複数の者に河西の軍事支配権が認定されていたことになります。称号は基本的に申請者の希望どおりに与えられる場合がほとんどで、新羅や任那などの軍事支配権が認められたからといって、実際に倭国王の勢力がこれらの地域におよんでいた証拠にはなりません。実はこのとき、倭王武は百済をもふくめた「七国諸軍事」を申請していたのですが、宋の王朝は百済を除いた六国諸軍事の称号しか認めませんでした。こちらのほうが、むしろ注目すべきことなのです。

［５－３］　軍事支配権（河西・吐谷渾・宕昌の場合）

年代	王名	都督諸州諸軍事					諸州刺史		
		涼	秦	西秦	河	沙	涼	西秦	河
423～444	河西王	○	(○)		○	○	○		
432～502	吐谷渾王			○	○	○		○	○
476～505	宕昌王	○			○		○		○

（坂元義種『倭の五王』より）

将軍号についても、武は宋から「安東大将軍」を認められました。その後、四七九年に斉から「鎮東大将軍」、五〇二年に「征東将軍」を受けたのは、実際に使者を遣わした結果でなく新王朝成立を記念した祝賀的なものといわれますが、たしかに安東→鎮東→征東と、倭王は将軍号のランクを上昇していっています。しかし、この時期に中国王朝と交渉をもたなかった新羅はともかく、百済王や高句麗王の将軍号と比べるとどうなるのでしょうか。

倭王が四七九年にたどりついた鎮東大将軍を、百済王はすでに四二〇年にうけており、倭王が征東将軍になった五〇二年には、百済王には征東大将軍が与えられます。高句麗の場合は南北両朝に朝貢しましたが、南朝からの称号をみると征東将軍はすでに四一三年、征東大将軍は四一六年にもらっていて、その後は車騎

［５－４］　将軍号の比較

	東晋		宋				斉		梁
驃騎大将軍								高	
驃騎将軍									百
車騎大将軍						高			倭
車騎将軍									
征東大将軍			高						
征東将軍		高							
鎮東大将軍			百				倭		
鎮東将軍	百				倭				
安東大将軍									
安東将軍				倭					
将軍号									
西暦	372年	413年	420年	438年	451年	463年	479年	480年	502年

（注）（坂元義種『倭の五王』を参照）

大将軍から驃騎大将軍と地位を上昇させます。将軍号にあらわれる倭王の評価は、高句麗や百済に比べれば常に最低のランクでありつづけたことになるのです。

(2)「己巳年の史実」

七支刀銘文や広開土王碑文につづいて、倭の五王の称号も、朝鮮半島における倭国の覇権を示すものではなく、「任那日本府」の存在を証明するものでもなかったといわなければなりません。ただ、軍事支配権にかかわる称号の要請は、任那支配への倭国の一貫した志向を示すものとはいえるでしょう。

朝鮮半島の諸国に対して優位にたっていたとする日本古代史像の中核をなすのが、「任那日本府」説でした。四世紀後半には大和朝廷が朝鮮へ進出して南部地方を直接支配下においたが、その支配のために設置した機関が任那日本府であり、五六二年に新羅によって滅ぼされるまで二百年間にわたって存続したというものです。しかし、日本府に関する記述は『日本書紀』にしかありません。それを裏付ける史料とされたのが七支刀や広開土王碑、倭の五王の称号だったのです。『任那興亡史』（一九四九年）で末松保和がいうとおり、「日本書紀の研究は、任那の歴史の材料の研究にほかならぬ」わけです。

八世紀のはじめに完成する『日本書紀』は、大和朝廷による統治の正統化を目的とした書物でした。その目的とかかわって、朝鮮諸国がもともと蕃国として日本に服属すべきものであること、天皇が朝鮮諸国を朝貢国として従える存在であることを示すのが主要なテーマのひとつとなっています。四世紀後半における朝鮮諸国との交渉のはじまりを、日本への服属の物語とし、神功皇后の事績として描きだしたのです。

その摂政元年を西暦二〇一年にあたる年に設定したのは、わざわざ『魏志』倭人伝の一節を註記して卑弥呼と同一人物であるかの如くにおわせ、実在性を印象づけようとしたのでしょう。そのため、四世紀後半の出来事が、干支二運（百二十年）くりあげた三世紀前半の神功年間のこととして記録されることになります。たとえば、『三国史記』が西暦で三七五年にあたる乙亥年としている百済の近肖古王即位が、『日本書紀』では二運くりあげた同じ乙亥年、すなわち西暦二五五年にあたる神功五五年のこととされているのです（第三章の表［3―4］を参照）。

そのような神功皇后の四九（己巳）年、すなわち二運くりさげれば西暦三六九年の記述が、実質的に朝鮮服属の始原を示す記事となっています。この年、神功皇后は荒田別らを将軍として出兵し、百済の将軍木羅斤資らとともに新羅を征伐して、任那七国を平定、さらに西方地域を征服して百済に与え、百済王に服属を誓わせたといいます。末松保和は、さすがに堅実な実証史家らしく手堅い史料批判をおこなって即位当初の三韓征伐などについては虚構性を指摘しながら、この「己巳（きし）年の史実」は否定しえないとの立場から、「画期的出兵」による七国平定を任那支配、任那日本府設置の出発点と

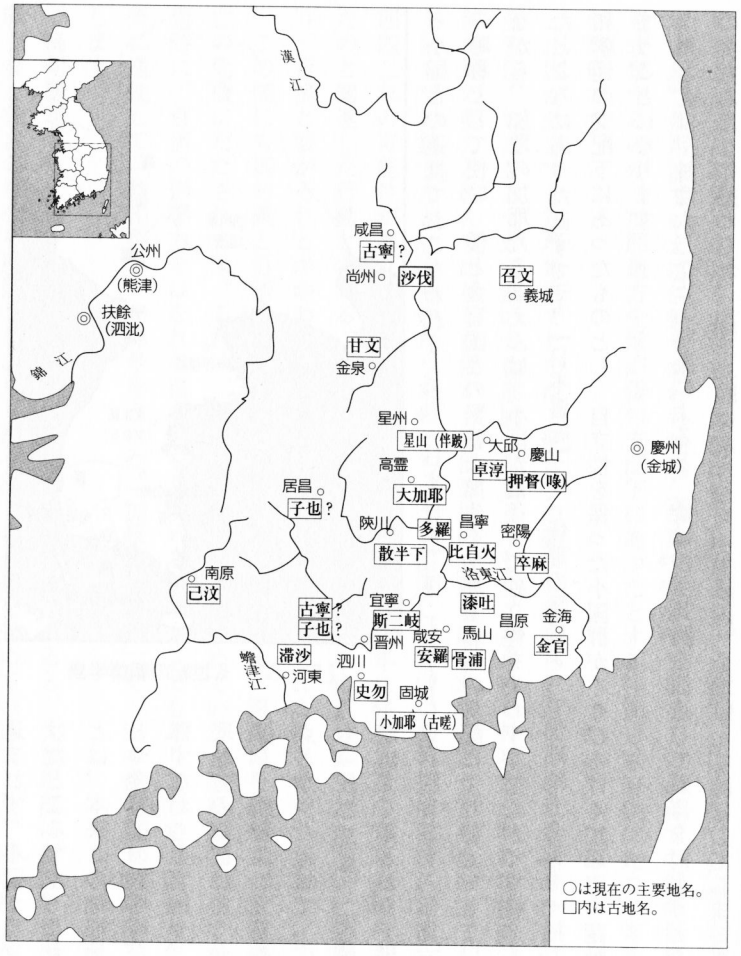
みなしました。

しかし、任那七国平定は、己巳年の記事のなかでもとくに具体性に欠け、唐突な印象をぬぐえません。しかも、それが何らかの史実の反映としても、よく読めば木羅斤資の作戦によるもので、むしろ真相は百済主体のできごとだったとも解釈できます。さらに、『三国史記』の四七五年の記事に出てくる「木劦満致」が、『日本書紀』（「木満致」）では木羅斤資が新羅を討ったときに新羅の女性とのあいだにもうけた子であると書かれていて、年齢的に矛盾が生じます。それを根拠にして、一連の記事を三六九年からもう一運（六十年）くりさげた己巳年、つまり四二九年のことだとする山尾幸久の見解もあります。

ともかくも、『日本書紀』の記事は、初発にあたる己巳年の段階ですでに、任那全域の支配が確立したかのような描き方をしています。したがって、任那日本府の歴史は、ひたすら五六二年の「滅亡」へむかっての歴史となり、末松も、「任那諸国の歴史は衰退一路の経過を辿り、任那日本府も腐敗の政治に堕した」「その大略百五十年の歴史は退歩への漸進であった」といわざるをえなかったのです。

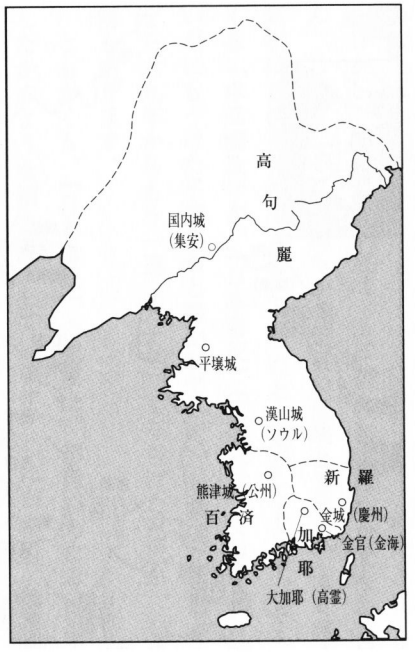
(3)　大加耶連盟の動き

ところで、『日本書紀』は、「任那」ということばを、加耶（加倻・伽耶・伽倻・加羅）地方全体をさす用語として使っています。加耶とは、かつての弁韓地方を中心に、百済や新羅による統合に組み



［５－５］　加耶の国々

（田中俊明『大加耶連盟の興亡と「任那」』を参照）



［5－6］　5世紀の朝鮮半島

込まれず、小国が自立性を保ちつづけたところです。これに対して任那とは、本来この加耶地方の小国のひとつ金官国の別の呼び名でした。任那すなわち金官国や、安羅国など加耶地方の南部は古くから倭と関係が深く、鉄資源の交易や文化交流の拠点となった地域で、広開土王碑文にも「任那加羅」「安羅人戍兵」の語が出てくるとおり、倭の出兵もこれら小国との連携でおこなわれました。『日本書紀』は、もともと金官国をさす「任那」を、加耶全体の呼称として使い、倭と金官国との緊密な関係を加耶全体への支配にすり替えてしまいます。しかしながら、加耶の加耶たるゆえんは、小国が最後まで独立性を失わず、したがって統一も完成しなかったところにあったはずです。『日本書紀』は、任那の語によって加耶地方全体を一括してとらえて大和朝廷の支配下にあったものとし、自立性を保った小国群がくりひろげる加耶史の躍動を見失ってしまうことになります。

たとえば、神功六二(壬午)年条によると、倭は沙至比跪(さちひこ)を派遣して新羅を討とうとしますが、新羅の美女ふたりに惑わされ、沙至比跪はかえって「加羅国」を攻撃して滅ぼしてしまいました。そのため加羅国王は百済に応援をもとめ、木羅斤資が派遣されて加羅の社稷を復したのだといいます。『日本書紀』の用法でいえば任那すなわち加耶（加羅）全体を支配しているはずの倭の将軍が、なぜ加羅を攻撃するのか。加耶地方全域が倭の支配下にあったとする任那日本府説にたつかぎり、理解しがたい事件です。

小国が分立する加耶地方でしたが、統合への動きも継続しており、その中心のひとつが南部地域の金官国、いまひとつが北部の大加耶国（高霊）でした。おそらく神功六二年の事件は、金官国など南部地域の勢力と結んで出兵した倭が、北部地域の大加耶国を攻撃しようとしたので、大加耶国が百済と結んで対抗したというものだったのでしょう。山尾によれば、この壬午年はさらに一運くりさげた四四二年の可能性があり、だとすれば、倭の五王が四三八年に任那加羅の軍事支配権を要請しはじめたのと関連した行動と考えることもできます。加耶の統一をめざして、大加耶国と金官国の対抗があり、百済と倭がそれとかかわった動きをしていたものとみられるのです。

この間にも高句麗と百済の対立はつづいており、四七五年、漢山城を攻略された百済はいったん滅亡の危機にたたされます。これは、百済との結びつきを強めていた大加耶国にとっても危機であると同時に、百済の影響力をはなれて自立性をたかめるチャンスでもありました。四七九年に中国南朝の斉に遣使して「輔国将軍」の称号をうけた「加羅国王荷知」を、田中俊明は大加耶国王の嘉悉(カシル)に比定します。

高句麗がさらに南下の圧力を強めて新羅との対立を深めると、大加耶国は新羅を救援して高句麗と戦うなど独自の外交を展開しながら、諸小国との連携を進めていきました。田中によれば、嘉悉王は

斉の筝にならって十二弦の加耶琴を作り、于勒に命じて十二の曲を書かせます。この十二曲は、それぞれの小国の歌謡をもとに作曲されたものとみられ、大加耶連盟の集まりの際に演奏されたのだろうと推測しています。加耶全体を倭の支配一色にみる任那日本府説では、小国同士の統一へ向けた動きや巧みな外交戦略など、ロマンをはらんだダイナミズムをとらえそこなってしまうことになります。

(4)「日本府の滅亡」

六世紀にはいると、朝鮮半島の情勢は大きく回転しました。新羅では五〇〇年に智証王、五一四年に法興王が即位して、急速な発展を開始します。漢山城を失ったあと熊津城（いまの公州）に都を移して再興した百済は、五〇一年に武寧王が即位し、依然として自立性を保っていた西南部の栄山江流域地方への支配力を強めるとともに、五一三年からは加耶西部に進出して己汶・帯沙を占領しました。こうした百済の圧迫に対抗するため、大加耶王は新羅との提携をはかり、五二二年に新羅の王女を王妃としてむかえます。新羅は、北部の大加耶との婚姻同盟を結んだうえで、五二四年から加耶南部への攻勢に出ました。

危機に陥った金官国など南加耶諸国の要請を受けたのでしょう、倭は軍隊を派遣しようとしますが、五二七年に筑紫の国造磐井が反乱をおこして妨害しました。磐井の背後には新羅との連携があったといわれますが、倭国もまた一枚岩ではなかったことになります。五二九年に新羅の攻撃で金官国は壊滅的な打撃をうけますが、磐井の乱を鎮圧した倭は近江毛野を将軍として派遣し、安羅国に駐屯しました。安羅はさらに百済にも出兵を要請し、百済軍も進駐してきます。しかし五三二年、ついに金官国の王族は新羅に降伏し、併合されました。こうした情勢のなか、新羅との婚姻同盟を解消して警戒を深めていた大加耶国は、安羅など南部諸国や百済・倭などとの連携を強めます。

実は『日本書紀』においても、「日本府」の言葉が出てくるのは、この時期に限られています。「日本」という呼称がこの時期に存在していなかったことはいうまでもなく、「倭府」「倭臣」などの呼称だったのでしょう。その実態は、安羅に駐屯する近江毛野や、これに付随した倭国の使臣などを指したものとみられ、いずれにしても、長期にわたった植民地支配の機関などではありえません。これをあたかも永続的な支配機構であるかのように描いているのです。「日本府」の活動として注目されるのが、五四一年および五四四年に開かれた「任那復興会議」なのですが、この会議は百済の都泗沘城で開催され、『日本書紀』の記述からみても、主導していたのは百済だったというしかありません。

加耶をめぐる状況は、このように百済と新羅の対決の色彩を深めていたのですが、それがすぐに決着にいたらなかったのは、北方から高句麗の圧力が強まっていたためでした。百済は、新羅と共同して高句麗との対決に臨み、五五一年には旧漢山城の奪回に成功します。ところが、このあと百済と新羅の対立となり、翌五五二年に百済はせっかく回復した漢山城を新羅に奪われてしまいました。五五四年、聖王は新羅に破れて戦死します。

新羅は、加耶への攻撃を本格化しました。ついに五六二年、大加耶国を滅ぼし、それと連合していた諸小国をも併合します。もともと加耶全体を倭の支配地であるかのように描いてきた『日本書紀』は、これをもって「任那の滅亡」とするのです。